12 月 26 日のメッセージ

聖書：マタイによる福音書　2：　1－12

「その星を見て喜びにあふれた」

神の子イエスが地上に来られたこと、それは全ての者を照らす光が地上に来られたことを意味しています(「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。」ヨハネによる福音書 1:9)。その喜びは当然、全ての者に伝えられるべきものです。ところが、イエス降誕の知らせは瞬く間に世界中に広がった、というようなことはありませんでした。むしろ、広い世界の片隅、小さな家畜小屋での出来事など、ほとんど誰も知らなかったと言って良いでしょう。

しかし神は、必要なときに、ふさわしい方法でこの喜びを知らせられるのです(「……わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」マタイによる福音書 2:2)。

輝く星を見た占星術の学者たちは、神が開かれた道、神が備えられた道を通ってエルサレムまでやってきます(「わたしはすべての山に道をひらき／広い道を高く通す。」イザヤ書 49:11)。もっとも、「広い道」とは彼らの心にとってという意味であり、実際の旅路は苦労の連続だったでしょう。それでも彼らは一路、イエスの下を目指します。イエス降誕の喜びを表すために、遠くから来ます(「見よ、遠くから来る／見よ、人々が……」イザヤ書 49:12)。神の恵みが「わたしの子」(詩編 2:7)であるイエスの上に豊かなることを示すためにやってきます(「神よ、……あなたによる恵みの御業を、王の子に／お授けください。」詩編 72:1)。自分たちに与えられている多くの恵みを携えて馳せ参じるのです(「……地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。」ヨハネの黙示録 21:24)。

ところが、この箇所を読むたびに毎回、不思議に思うのですが、学者たちは直接イエスのところに行くことができません。ここには人間の限界が表現されているように思えます。何か、自分の思い込みに従ったために道を誤ったのでしょうか。

あるいは、神が学者たちだけではなく、エルサレムの人々にも喜びの知らせを伝えようと思われたために、学者たちを足止めなさったようにも思われます。少しでも喜びが伝わってほしいと。ただ、この学者たちがエルサレムに立ち寄ったことによって、大きな悲劇も引き起こされたのではあるのですが……(「さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、……ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。」マタイによる福音書 2:16)。

いずれにせよ、何とか道を取り戻した学者たちは、星を見て喜びにあふれます(「学者たちはその星を見て喜びにあふれた。」マタイによる福音書 2:10)。これまで見つめてきた星を再発見した喜びであったでしょう。この星さえ見えていれば、自分たちは救い主のところに行くことができる、と。星に導かれた学者たちはもう道を誤ることはありません。イエスのおられる家畜小屋へと到着します。

彼らは、星が照らし出す家畜小屋を見て喜びにあふれるのではなく、星のように輝くイエスを見て喜びにあふれました(「……神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。」ヨハネの黙示録 21:23)。その喜びを示すために、自らに託された恵みを差し出します(「……彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」マタイによる福音書 2:11)。そして、その喜びを伝えるために、それぞれのところへと戻っていきます。

私たちを導く星もいつも輝いているのですが、私たちはすぐに見失ってしまいます。今こそ目を上げて星を見つめたい。星を見て喜びにあふれたい。星に導かれて新しい 1 年へと向かって行きたいと願うのです。